

回復を計りつつある。

昭和49年(1974)埼玉県教育委員会による天然記念物緊急調査、そして、昭和51年から6年間に及ぶ羽生市教育委員会による“ムジナモ保護増殖事業に係る調査団”による環境調査、水質改善工事、そして放流実験が繰返されることによって、漸くムジナモが自生水域で生育し増殖可能なことが確められるようになった。この頃、市民の自然文化財への関心が高まり、昭和58年10月羽生市教育委員会と筆者らの呼びかけで“羽生市ムジナモ保存会”が発足し、多量の増殖苗が放流実験に供給されるようになった。しかし、自生水域における生態系の崩壊を建て直すことは難しく、頻発する植物食性魚類やカエルの幼生らによる食害によって水生植物は皆無の状態

が続き、ムジナモを放流してもたちまち消滅してしまう。幾重にも水路を遮断した金網の囲いの中でしかムジナモは増殖できないのが実状であった。既に水質はかなり改善され、ムジナモの好餌となるプランクトンの発生リズムも整い、防魚網の中で夏期間は盛んに生育し増殖させることは可能となった。しかし、冬芽形成期や浮上展開の時期に食害され消滅してしまうため自然状態での越冬が不可能であった。その対策として、自生水域の水路の一角を仕切って魚類等を徹底的に駆除し、他種の大形水生植物の多量移植を試みることで、漸く昨年、自然状態でのムジナモ越冬に成功したのである。今後、このような処置をほどした水路を順次広げてゆき、自生状態回復に向けて努力してゆきたい。

## クサシャジクモ東京湾埋立地に発生

齊藤吉永

クサシャジクモ(シャジクモ科) *Chara foetida* A. Dr. は日本では広く淡水の池沼に繁殖するといわれているが千葉県下からの報告については筆者の調査不十分で知らないが、さきに本会報No.31(1988.3)に千葉県下のカワツルモの報告をしたが、このカワツルモの1部を栽培していたところシャジクモも一緒に生育していることが判った。蔵卵器を検してクサシャジクモであることを確認したが現地の状況を知るべく1988. 5. 11に行くと新聞の報じたとおりブルトナーによって土砂で埋立てられてしまっていた。

同月30日に別の調査で通りかかったので立ち寄って見ると土砂で埋立てられたものの約半分の50mは土砂の量が少なく低いために雨水が10cm程たまっていた。

附近はエゾウキヤガラとかウシオツメクサが生えている程度でカワツルモ・クサシャジクモの姿はなかった。

その後2ヶ月余を経た8.8に某民法TV局関係の依頼でプロデューサーを連れて湾岸埋立地の何箇所かを歩いてこの地にも寄って見たところメダからしき群れが水深10cm程の水たまりを泳いでいた。

1週間程たって8.16にメダからしきものの正体を見るために採集用具を用意して出掛けたものの雨天続きの今夏の気象の影響で意外にも水量が多く一匹も捕獲出来なくすずすと引き返したが9.22身仕度も十分に再度挑戦し数十匹を得た。

帰宅後検するに尻ビレの特徴でグッピー科のカダヤ

シ *Gambusia affinis* Baird et Girard であることが判った。

御存知の様にカダヤシはメキシコ中部から北米のニュージャージー州あたりまで分布する種で、我が国には1919年に移入され、タツミンノーと呼ばれていた様だが胎生の上に汚濁、高塩分にも強いということで普通の魚類では余り生活環境の良くないこんな場所で大繁殖したものであろう。

それにしてもどこから入って僅か2ヶ月程で大群になったことが驚きでもあり不思議である。

また僅か数株ではあったが10cm程に伸びたカワツルモも見つかった。

然しカワツルモもカダヤシも共に人為的に消滅させられることは時間の問題であることは否めない。(1988. 9. 23)

○『館林市の野草 第3集 渡瀬の野草』(館林市教育委員会、昭和63年3月、32頁)

群馬県館林市は多々良沼、茂林寺沼などかつては豊富な水草の生育していた所である。同市北部に位置する渡瀬地区の植物の現況報告がこの冊子である。調査には本会会員青木雅夫氏があたられた。路傍、休耕田、河原・土手の植物につづき、水生植物が扱われている。オグラノフサモの記録は注目される。しかし、ヒシでさえも分布が非常に限られてきており、他の種も含めて水草の将来は楽観できない状況にあるようだ。後半は高等植物目録と植物概観となっている。